

# 「いなぶつく」創刊10号

## 高知大生と住民協働発行

南国市稲生

【香長】南国市稲生の地域広報誌「いなぶつく」がこのほど、創刊2年で節目の10号となった。高知大学地域協働学部稲生実習班が住民らと奇数月に発行。住民が古里の今昔を再発見し、地域活動への積極参画につながるツールとして定着している。

(横田幸成)

先輩から制作を引き継いだ3人が9号を出したのが3月末。新型コロナウイルス禍で、10号刊行までに半年もかかったが、その間も学生はビデオ会議アプリで取材を継続した。

5、7月には、「住民の手作りマスクコレクション」「アマビエ解説」などコロナネタも盛り込んだフェイスブック(FB)「いなぶつく」を周知しようと提案したのが始まり。10号はA4判全カラーの8頁。360部発行し、全戸配布が目標だ。



創刊から10号を数えた「いなぶつく」をPRする高知大生たち(南国市の稲生ふれあい館)

## 古里の今昔再発見 コロナでFB版も

学生が実習パートナーの集落活動センター「チム稲生」を周知しようと提案したのが始まり。10号はA4判全カラーの8頁。360部発行し、全戸配布が目標だ。名物コーナーも次々。キーマンを紹介する「気になるアノ人」には、移住したサンゴ工芸家やボランティア、書道の先生などが登場。ねえ、知っちよった?」では、実習の柱でもある交流サロンや防災活動、地区運動会などを伝える。ほかに、学生の活動を紹介する「大学生なにしゆうが?」などの好評企画も。清少納言終の棲家伝説」などの昔話のほか「稲生発祥とされる稲作の方法は?」(答えは二期作)など、古里クイズ満載のクロスワードもある。

ただ、長らく住民と会えなかっただけに、「現場で感じたことを強く発信したい」と思うように「10号に挑戦する桃農家から、ほ場整備事業まで硬軟織り交ぜた話題をそろえた。

愛読する住民らも「古里の再発見につながる」「自分たちの声も載るの」で、協力するのが楽しみ。指導する玉里恵美子教授(55)は「住民の地域課題共有や参画の機会を増やしている。協働が、住民力の向上にもつながる」と期待している。